

平成 25 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

三島スピリット（自主自律の精神）の深化を図り、将来を担う人材を育成し、地域に信頼される学校をめざす。

- 1 高い志を掲げ、その実現に向けて真摯に努力する生徒を育成する。
- 2 自他を尊重し、三島高生として自覚と責任ある行動をとることができる生徒を育成する。
- 3 国際感覚に富む社会人として自立し、社会や地域の一員として積極的に貢献しようとする人材を育成する。

2 中期的目標

1 進路を切り拓く確かな学力の育成

- (1) 本校の生徒実態を踏まえた、学習到達目標を確立し、授業の質を向上させることにより、学力の定着を図る。
 - ア 授業アンケートを活用した授業改善に積極的に取り組み、教員の授業力を組織的に向上させる。
 - イ ICTを活用した授業や生徒にとって充実した授業、効果的な授業のあり方を研究し、組織的に授業の質の向上を図る。
 - ウ 講習・補習の充実、土曜日の活用など、多様な学習の機会を設けて生徒の学習意欲を高め、自学自習力を育成し、学力の定着を図る。

※ 授業アンケートによる生徒の授業満足度を、平成 27 年度には 90%以上とする。
 ※ ICTを活用した授業を実施した教員数を、平成 27 年度には全教員の 7 割程度とする。
 ※ 学校教育自己診断における「授業で自分の考えをまとめたり、発表する機会がある」の肯定的回答を、平成 27 年度には 75%以上とする（平成 24 年度 58%）
- (2) 生徒が第 1 希望の進路を実現するための組織的計画的な進路指導体制を確立する。
 - ア 3年間を見通した進路指導計画を策定し、データに基づいた生徒一人ひとりの学力の伸びや課題を把握し、生徒の関心・意欲を高める適切な支援を行う体制を確立する。
 - イ 高い志を持ち、高校・大学での学びを将来につなげ、主体的に進路選択ができるよう、外部人材を活用した様々な機会を設定する。

※ 国公立大学への現役合格者数を、平成 27 年度には 80 名以上とする（平成 24 年度 24 名）
 ※ センター試験受験者数を、平成 27 年度には 90%以上とする（平成 24 年度 68%）

2 規律・規範の確立と豊かな人間性の育成

- (1) 生徒自らが規範意識やモラルを高める取組みを組織的に推進する。
 - ア 自らを律し、他者を思いやり、公共のマナーやルールを守るなど、規範意識を醸成する取組みを実施する。
 - イ 自己管理能力を高める取組みを推進する。特に時間管理を徹底させ、勉強時間と部活動時間のメリハリをつけさせる。

※ 1日平均遅刻者数を、平成 27 年度には 10 名以下とする（平成 24 年度 19.3 名）。
- (2) 学校行事や部活動を通して、豊かな人間性を育成する。
 - ア 生徒会活動、学校行事、部活動など、生徒の自主的活動の活性化を図る取組みを充実する。
- (3) 人権教育、国際理解教育を充実し、国際的な視野を育む。
 - ア オーストラリア語学研修を充実させ、多様な方法によりコミュニケーション手段としての英語力を向上させる。
 - イ 国際交流の機会を増やし、互いの違いを認め合い、共に生きていく多文化共生の精神を涵養し、人権意識の向上を図る。
 - ウ 3年間を見通した人権教育推進計画の内容を精査し充実を図る。

3 地域に信頼される安全で安心な学校づくり

- (1) 防災教育を推進する。
 - ア 生徒が自らの命を守り抜くために「主体的に行動する態度」を育成する防災教育を推進する。
- (2) 教育相談体制を一層充実させ、生徒に対する支援活動ができる体制を確立する。
 - ア 教育相談室の機能を充実し、スピード感をもって適時・適切な指導ができる体制を確立する。

※ 学校教育自己診断における「相談できる先生がいる」の肯定的回答を、平成 27 年度には 75%以上とする（平成 24 年度 62%）。
- (3) 地域連携を推進し、地域に貢献しようとする人材を育成する。
 - ア 中高連絡会を開催し、中学校との連携を深め、生徒理解を促進する。
 - イ 地域の幼稚園・小学校・中学校・大学との連携を深める。

4 効率的な学校運営体制の確立

- (1) 学校総体として、スピード感をもって目標を共有し達成できる組織を確立する。
- (2) 学校運営の中心となるミドルリーダー層を育成する。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 25 年 12 月実施分]	学校協議会からの意見
<p>【学習指導等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学力充実委員会が中心となって、授業アンケートを活用した授業改善に積極的に取り組み、「教科として、研究授業や授業アンケートの結果を受けとめ授業改善に効果をあげている」と答えた教員が 74%であったのに対して、「先生は研究授業や授業アンケートの結果を受け、授業改善をしている」と答えた生徒は 58%にとどまった。授業改善の内容について、生徒に伝えていく必要がある。 <p>【生徒指導等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「部活動等と勉強の両立ができています」生徒は 48%、「子どもは部活動と勉強の両立ができています」と答えた保護者は 58%であった。「高校生活で一番頑張ったこと」は「部活動」と答えた生徒が 61%いることを考え合わせると、文武両道を達成するための取組みが是非必要である。 ・「学校に親しい友人がいる」生徒は 95%、「子どもは学校に友達がいると言っている」と答えた保護者は 96%と非常に高く、その結果として「学校に行くのが楽しい」生徒 82%、「子どもは学校に行くのを楽しみにしている」84%につながったと考えられる。 ・今年度、教育相談体制の一層の充実を図ったため、「教育相談体制が整備されており、生徒は学級担任以外の教職員と相談することができる」と答えた教員が 94%に上ったのに対し、「担任以外にも保健室や相談室等で、気軽に相談することができる先生がいる」と答えた生徒は 52%にとどまった。教育相談室の利用の促進に努める必要がある。 <p>【その他】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「情報提供の手段として、学校のホームページが活用されている」と答えた教員は 81%であったのに対して、「学校のホームページをよく見る」保護者は 23%であり、保護者にホームページについて周知する必要がある。 ・「学校は教育活動全般について生徒や保護者の願いに応じている」と答えた教員が 77%であるのに対して、「学校は保護者の期待に応じている」と答えた保護者は 61%にとどまった。学校として、保護者の期待に応えられるよう努力したい。 	<p>第 1 回 (6/8)</p> <p>○H25 年度学校経営計画について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒にどのような力をつけたいのか、どんな生徒を育てるのかを明確にし、今、何をすべきかを常に意識して学校の教育活動を実践し、それを共有する必要がある。 ・社会の中でリーダーシップを発揮できる人材に育つよう、具体的な仕掛けを作る必要がある。 ・アクティブラーニングが必要である。 ・授業アンケートのデザインが重要。PDCAの中で、PDがあつて、次にアンケートとなるが、満足度だけでなく、達成感や充実度を問う必要がある。 ・ICT活用をより効果的にするためにも、まず、しっかりした授業ができることが前提である。また、高槻市の全中学校にデジタル黒板が設置されるので、共同研究してはどうか。 <p>第 2 回 (10/26)</p> <p>○H25 年度学校経営計画（進捗状況）について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三島スタンダード（3年後の学習到達目標を示したもの）については、保護者・生徒とどこかでキャッチボールできる体制があるとよい。 ・シラバスについて、中学校は平成 28 年度までに目標準拠に基づく評価基準を作成し、保護者に公開する予定である。高校もその観点で作成する必要がある。 ・スマートフォンが普及し、LINE等に関わる問題事象に対応するためにも、保護者との連携が一層必要である。 ・今後、経験の少ない教員が増加することを踏まえて、組織改編を行い、組織的に動ける体制を構築したところなので、時間がかかっても新しい組織を定着させるべきである。 <p>第 3 回 (1/25)</p> <p>○H25 年度学校経営計画（自己評価）に関する評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・PDCAをまわすときに、出てきた結果を分析して、課題を明らかにし、対策を立てることが大切なので、評価指標が達成できたかどうかのみで評価するのではなく、結果を丁寧に分析し、三島高生の特性は何か、特性に見合った成果とは何かを考える必要がある。 ・マイナスの評価を出している生徒に対する対策を立てる必要がある。 ・授業改善については、アクションリサーチの手法も必要である。 ・日々の教育を通じて、これからの社会を支えていく生徒を育てるメッセージを出してほしい。

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 進路を切り拓く確かな学力の育成	<p>(1) 学習到達目標の確立、授業の質の向上 ア 授業アンケートを活用した授業改善 イ 「三島スタンダード」の作成 ウ 自学自習力の育成</p> <p>(2) 第1希望の進路実現に向けた取組み ア 教員のガイダンス力のスキルアップ イ 外部の人材を活用したキャリア教育の実施</p>	<p>(1) ア 昨年度の授業アンケートを踏まえて授業改善に取り組む。 イ 教科ごとに3年後の学習到達目標を明確にした「三島スタンダード」を作成する。 ・学校経営推進費事業計画に基づき、ICTを活用した授業を実施し、授業の効率化、授業の質の向上を図る。 ・グループ学習やディベートなど、授業に言語活動を積極的に取り入れ、コミュニケーション力やプレゼンテーション力の育成に努める。 ウ 年度当初に、予習－授業－復習のサイクルの確立を徹底指導し、日々の家庭学習にしっかり取り組ませる。 ・学力充実グループ主導による組織的な講習体制を構築する。 ・多様な学習の機会として、土曜日に教育産業を活用した講習を行う。</p> <p>(2) ア 進路指導グループ主導によるデータ分析に基づいた研修会を開催し、教員のガイダンス力のスキルアップを図る。 ・生徒が第1希望の進路を実現できるよう、全教員体制で取り組む。 イ キャリア教育の観点から、卒業生や外部の人材を活用した取組みを実施する。</p>	<p>(1) ア 授業アンケートによる生徒の授業満足度 80%以上 イ 「三島スタンダード」の作成 ・ICTを活用した授業を実施した教員数を全教員の5割程度にする ・学校教育自己診断における「授業で自分の考えをまとめたり、発表する機会がある」の肯定的回答 65%以上(平成24年度 58%) ウ 平日の平均家庭学習時間1年60分、2年90分、3年120分を目標とする ・講習参加生徒の満足度70%以上</p> <p>(2) ア 国公立大学への現役合格者数40名以上(平成24年度24名) ・センター試験受験者数75%以上とする(平成24年度68%) イ 学校教育自己診断の「自分の将来をはっきり決めている」生徒の割合70%以上</p>	<p>(1) ア 7月に実施した授業アンケート結果を踏まえ、各教科授業改善について協議し、11月に研究授業を行った。 【授業アンケート(12月実施)による生徒の授業満足度79%】(○) イ 教科ごとに学習到達目標を明確にした「三島スタンダード」を作成した。 ・10月に指導教諭によるICTを活用した研究授業を実施し、11月の公開授業時に各教科ICT等を活用した研究授業を実施した。日々の授業でグループ学習やプレゼンをする教科もあった。 【ICTを活用した授業を実施した教員数51%、学校教育自己診断「ICTを活用した授業」77%、「授業で自分の考えをまとめたり、発表する機会がある」60%】(○) ウ 1年において、数学・英語の週末課題を課し、家庭学習を習慣づけた。1年の平日の平均家庭学習時間は53分、休日は87分(8月末調査)(○) ・学力充実Gが主導して、7月に全学年講習を実施した。 ・教育産業を活用した土曜日講習(2年英語、3年数学)を実施した。 【講習参加生徒の満足度96%】(◎)</p> <p>(2) ア データに基づいた進路情報提供のための教員向けガイダンスを全教員対象、各学年対象に実施した。 【センター試験受験者数66%】(△) 【国公立大学現役合格者数25名】(△) イ 10月に1年生対象とした卒業生(5期生)による講演会を実施し、好評であった。 【学校教育自己診断「自分の目標を定め、それに向かって努力している」70%】(○) ※次年度は、卒業生等をさらに活用し、キャリア教育を推進したい。</p>
2 規律・規範の確立と豊かな人間性の育成	<p>(1) 生徒自らが規範意識やモラルを高める取組み ア 挨拶の励行、自転車マナーの向上、清掃の徹底、遅刻者数の減少 イ 時間管理の徹底</p> <p>(2) 学校行事や部活動を通して、豊かな人間性を育成する。 ア 生徒の自主的活動の活性化</p> <p>(3) 人権教育、国際理解教育の充実 ア コミュニケーション手段としての英語力の向上 イ 国際交流の機会の増加、多文化共生の精神の涵養 ウ 3年間を見通した人権教育推進計画の充実</p>	<p>(1) ア 挨拶運動、自転車通学マナー向上運動など、生徒会が中心となって実施する。 ・生徒保健委員会が中心となって、学校内外の清掃を行い、きれいな学校づくりを推進する。 ・遅刻ゼロ週間を設定し、1日平均遅刻者数を15名以下とする(平成24年度19.3名) イ 「進学校における部活動」という観点で、週休日等の使い方を検証し、勉学と部活動の両立が図れるような取組みを実施する。</p> <p>(2) ア 生徒会が中心となって、エコキャップ運動を展開する。 ・部活動単位で何か一つボランティア活動に従事するよう指導する。</p> <p>(3) ア 英語によるプレゼンテーション等の機会を設定する。 ・英語スピーチコンテストを実施する。 イ 高槻市や大学と連携し、国際交流の機会を設定する。 ・公的な交流機関を活用し、異文化理解を推進する。 ウ 人権講演会、人権HR計画の内容を充実する。 ・高槻支援学校等との交流を通して人権意識を涵養する。</p>	<p>(1) ア 1日平均遅刻者数15名以下(平成24年度19.3名) イ クラブ加入率90%以上を維持する。 ・学校教育自己診断における「勉学と部活動の両立ができた」70%以上</p> <p>(2) ア エコキャップ運動参加生徒の達成感80%以上</p> <p>(3) ア 英検等の資格試験受験者2割増(平成24年度英検受験者105名) イ 学校教育自己診断における「環境、国際理解、福祉ボランティアなどについて学習する機会がある」の肯定的回答65%以上(平成24年度53%) ウ 学校教育自己診断における「人権について学習する機会がある」の肯定的回答65%以上</p>	<p>(1) ア 生徒会が中心となった自転車通学マナー向上運動については、次年度の課題。(△) ・部活動中心に夏休み・冬休み中に学校内外の清掃を実施した。(○) ※次年度以降も継続して実施したい。 ・1,2学期の1日平均遅刻者数30.5人(カウント方法の変更及び学級数の増加が原因)。遅刻ゼロ週間中は1日9.7人。(△) ※遅刻ゼロ週間中には指導効果が上がっているの で、次年度は指導内容を検討したい。 イ 各部単位で取り組んでいる勉学・規律・その他についてアンケートを実施し、実態を把握した。2月には土曜日の部活動についてアンケートを実施する。次年度以降、勉学と部活動の両立という観点から週休日等の使い方を検討する。 【クラブ加入率91.9%、学校教育自己診断「高校生活で一番頑張ったことは部活動」61%、「自分は部活動等と勉強の両立ができています」48%】(△)</p> <p>(2) ア 生徒会中心に、エコキャップ運動を行った。 ・夏休みや冬休みに部活動単位で通学路の清掃活動を行った。</p> <p>(3) ア 7月のオーストラリア語学研修時に高槻市親善大使としてトゥーンバ市長を表敬訪問した。11月にはトゥーンバ市長一行が本校を訪問し、英語による学校紹介のプレゼン等を行った。その後、日本人通訳の方の講話を聞く機会を設け、生徒20名程度が参加した 【英検受験者数56名】(△) イ 10月に大阪観光コンベンション協会と連携し、インド、台湾の高校生が来校し、英語によるプレゼンや英語等の授業で交流した。 【学校教育自己診断「環境、国際理解、福祉ボランティアなどについて学習する機会がある」53%】(△) ウ 1年生で4月に、人権HR「自分を見つめる」を実施した。クラスの生徒の「悩み」や「しんどさ」「課題」をつかむことができ、生徒把握や理解に役立った。 ・10月17日に全生徒対象の人権講演会を実施するにあたって、事前学習の充実を図った。 ・9月の文化祭で高槻支援学校との交流を実施し、支援学校生徒の作品展示も行った。11月にも交流会を実施した。また、1月には本校生が実行委員長を務める「高校生がつくるふれあい冬まつり」が行われた。 【学校教育自己診断「命の大切さや社会のルールについて学ぶ機会がある」81%】(○)</p>

府立三島高等学校

<p>3 地域に信頼される安全で安心な学校づくり</p>	<p>(1) 防災教育の推進 ア 主体的に行動する態度の育成</p> <p>(2) 教育相談体制の充実、生徒に対する支援活動体制の確立 ア 教育相談室の機能の充実</p> <p>(3) 地域連携の推進 ア 中高連絡会の開催 イ 地域貢献の推進</p>	<p>(1) 防災教育の推進 ア 生徒が自らの命を守り抜くために「主体的に行動する態度」を育成するための専門家による講演会等を実施する。</p> <p>(2) ア・教育相談委員会の活用を促し、生徒に対する支援活動体制を確立する。 ・相談窓口、相談室の利用を促進する。</p> <p>(3) 地域連携の推進 ア 中高連絡会を開催し、生徒理解を促進する。 イ 地域の清掃活動に参加するなど、地域に貢献する姿勢を育む。</p>	<p>(1) ア 学校教育自己診断における「学校で事件・地震や火災などが起こった場合、どう行動したらよいか、知らされている」の肯定的回答を 100%にする。</p> <p>(2) ア 学校教育自己診断における「相談できる先生がいる」の肯定的回答 70%以上(平成 24 年度 62%)。</p> <p>(3) ア 中高連絡会参加校の満足度を 70%以上とする。 イ 地域の清掃活動参加部活動数を 5 以上にする。</p>	<p>(1) ア・10月の避難訓練時に、生徒が自らの命を守り抜くために「主体的に行動する態度」を育成するための講演会(東日本大震災復興サポート協会)を実施した。 【学校教育自己診断における「学校で事件・地震や火災などが起こった場合、どう行動したらよいか、知らされている」82%】(△)</p> <p>(2) ア・教育相談委員会を定例開催し、生徒に対する支援活動体制の充実を図った。教育相談室が教室に入れない不登校傾向にある生徒の別室登校室として機能した。 ・7月17日、発達障がいについての職員研修を実施、11月21日にはカウンセリングに関する職員研修を実施した。 ・課題を抱える生徒及び保護者に対してカウンセリング活用を促進した。 【学校教育自己診断「担任以外に相談できる先生がいる」52%、「先生は、いじめなど私たちが困っていることについて真剣に対応してくれる」72%】(○)</p> <p>(3) ア・5月に本校で初めて中高連絡会を実施した。次年度は、時期や内容についての反省点を整理し、より有効な連絡会になるよう改善する。(△) イ・地域の清掃活動については、今年度は日程があわなかった(実力テストと重なった)ため、別の日に小学校体育館のワックスがけや清掃活動を行った。【参加部活動3】(○) ・夏休み・冬休みに部活動単位で通学路の清掃活動を行った。</p>
<p>4 効率的な学校運営体制の再構築</p>	<p>(1) 学校総体として、スピード感をもって目標を共有し達成できる組織を確立する。</p> <p>(2) 学校運営の中心となるミドルリーダー層を育成する。</p>	<p>(1) ア 昨年度改編した新組織の円滑な運用を図る。</p> <p>(2) ア 経験の少ない教員の研修組織を立ち上げ、ノウハウが継承できる組織づくりを進める。</p>	<p>(1) ア 学校教育自己診断における「各分掌や各学年間の連携が円滑に行われ、有機的に機能している」の否定的回答を 10%以下とする(平成 24 年度 29%)</p> <p>(2) ア 学校教育自己診断における「経験の少ない教職員を学校全体で育成する体制がとれている」の「あてはまる」の割合を 60%以上とする(平成 24 年度 25%)</p>	<p>(1) ア・マネジメント会議 → 運営会議 → G(グループ)会議の流れが作れた。 ・教科担当者会議の形態など、3つの学年で統一した形で会議・生徒指導がほぼ行えた。 【学校教育自己診断における「各分掌や各学年間の連携が円滑に行われ、有機的に機能している」の否定的回答 20%】(△)</p> <p>(2) ア・昨年に続き、経験の少ない教員の研修組織を立ち上げ、指導教諭を中心に経験者を交えた若手育成研修会研修会を実施した(3回実施)。 ・職員室の座席配置を初めて担任を持った教員の近くに経験豊富な教員を配置するなど、工夫した。 ・日頃の具体的な事象に対する解決策の相談を受け、複数の教員で意見を伝える、初めて担任を持った教員の保護者懇談に経験豊富な教員が同席するなど、学校全体で育成する体制がとれた。 【学校教育自己診断における「経験の少ない教職員を学校全体で育成する体制がとれている」の「あてはまる」7%、「だいたいあてはまる」69%】(△)</p>